

## 中国における高齢者虐待の問題 (2)

—— その実態を中心に ——

張 萍

### 〔抄 録〕

前稿の「中国における高齢者虐待の問題 (1)」では、筆者は道德と法律の視点から、家庭内での高齢者に対する虐待行為について定義した。紙幅の制限で、本稿ではまずこの定義に基づいて、身体的虐待、経済的虐待、財産権の侵害の実態を考察した。

身体的な虐待は、成年子女または孫が故意に高齢の親あるいは祖父母に暴力を加え、身体に外傷が生じ、直接的な痛みを伴う行為を指す。事件の多くは農村地域で発生しており、被虐待高齢者自身の我慢、第三者が家庭内部のことに介入しにくいこと、法律の不備などが虐待事件の頻発につながっている。

経済的な虐待は、扶養義務を持つ者が、経済力を持っているにもかかわらず、経済的に自立できない高齢の両親に扶養義務を果たさないことを指す。農村では経済的に自立できず、子に頼るしかない高齢者は非常に多いため、被害の対象となっている。

高齢者の財産権に対する侵害は、親族が高齢者本人の意思・利益に反して、彼らの財産をせびったり、詐取したり、または不当に使用することを指す。親の脛かじりおよび高齢者の財産を不当に占有することが、その主な現れである。高齢者の中では、女性、配偶者を失った人、再婚を望んでいる人は子供からの財産侵害を受けやすい。

キーワード：身体的虐待、経済的虐待、財産権の侵害

### は じ め に

前稿の「中国における高齢者虐待の問題 (1)」では、筆者は道德と法律という二つの側面からの考察を通して、家庭内で起こった高齢者虐待について次のように定義した。高齢者虐待の被害者に関しては、60歳以上の者と年齢を限定し、虐待者に対しては、高齢者の親族と限定した。高齢者虐待の行為については、身体的な虐待、精神的な虐待、経済的な虐待、介護・世話の放棄、財産権の侵害、婚姻自由の侵害の六つに類型化して規定した。紙幅の制限で、本稿ではまずこの定義に基づいて、身体的虐待、経済的虐待、財産権の侵害の実態を考察してみる。

周知のように、親孝行は中国の伝統文化の重要な構成部分である。しかし実際のところ、親孝行が社会的に高く評価されると同時に、子による父母への虐待や孫による祖父母への虐待現象はずっと存在してきた。ただし、このような行為は家庭内という閉じた人間関係の中で行われるので、外部の人は把握しにくい。それに「家庭内の醜いことは外へは出してはいけない」、「家族の面子を保ちたい」などへの配慮から、被虐待高齢者が親族の虐待を受けても安易に自分の不幸を他人に吐露しないため、長い間、家庭内での高齢者虐待問題に関する研究は非常に困難なことであった。近年、高齢者の権益擁護に関するキャンペーンにより、高齢者自身の権利意識が強くなり、法律に依拠して自分の権益を守る高齢者も増えてきている。また、高齢者虐待事件が重大な社会問題としてよくマスコミに取り上げられているため、いままでも家庭内に隠蔽されていた事件が公になり、この問題に関する資料の収集がし易くなり、研究も可能になった。紙媒体およびインターネットで披露されている高齢者虐待事件が、本論文の主な研究素材となっている。

## 1. 身体的な虐待

身体的な虐待とは、即ち成年子女または孫が故意に高齢の親あるいは祖父母に暴力を加え、身体に外傷が生じ、直接的な痛みを伴う行為を指す。被虐待高齢者に重大な負傷をさせ、ひいては死亡させる事件もしばしば発生している。

### 1.1 暴力を振るう口実にみる事件の類型

虐待者が高齢者に暴力を振るう時、様々な口実がある。虐待者が主張している「理由」から、身体的な虐待事件を次のように分類できる。

#### (1) 両親を扶養する責任を果たしたくないために暴力を振るうパターン

実例 1. 貴州省の岑某が6人兄弟の中の唯一の息子として幼い頃から両親に溺愛され、結婚してからもずっと両親と同居してきた。しかし、80代になった両親の体が日増しに弱くなるにつれて、岑某は両親を自分の生活を邪魔する存在とみて、どうしてもこの重荷を下ろしたいと思った。彼がよくあらを探して父親に暴力をふるい、ついに両親を家から追い出してしまった。お金も食料もない両親は近所の方や鎮政府の救済だけで辛うじて生計を立てている。父親への暴力の処分として、岑某が警察部門に拘留されたこともあり、親子関係を修復させるために鎮政府や村民委員会が調停したこともある。しかし、岑某は改めようとせず、両親への虐待がますますエスカレートする。仕方なく、2005年11月に彼の父が裁判所に訴状を提出して、息子の虐待行為を懲罰することを要求した。裁判の結果、岑某の行為は虐待罪と判定され、1年の懲役が科せられた。村人に法律知識を普及す

るために、この事件の裁判が岑某の居住地で公に行なわれ、傍聴者が5000人にも達した<sup>(1)</sup>。

実例2. 2011年9月、蘇州市で起こった孫による祖父を傷害する事件がネット上で大きな話題となっている。暴力を受けたのは息子二人を有する張某という78歳の高齢者である。4年前、張某が住んでいる村は都市開発の対象地となるため、移住の補償としてすべての村民に均等に新しい住宅が配られた。息子家族にもっと大きな新しい住宅をもらえるため、張某夫婦は自分に配られるはずの80平米の住宅を二人の息子にそれぞれ40平米を贈与した。その代わりに、二人の息子は3年ごとに交代して両親と同居して老後の世話をすることを約束した。ところが、両親の住まいに関して、長男が提供したのは建物の5階にある屋根裏部屋で、二男が提供したのは建物の1階にある車庫である。事件が発生した時は、老夫婦はすでに二男の車庫に3年間住んでおり、長男が提供した5階にある屋根裏部屋に引っ越すべき時期であった。しかし、年老いて足の力が衰えた老夫婦はエレベーターもない5階での生活を躊躇して、約束の期限がきれても引っ越すことができなかった。腹を立てた二男は両親を追い出すため、まず車庫内の水道を止め、さらにその息子即ち老夫婦が幼児から成人まで世話をしていた孫は祖父母に「家賃を出せ」と要求した。祖父母が家賃を払えないため、怒った孫は祖父に暴力を振るった。結局、孫の暴力により、祖父の片目が見えなくなった。通報を受けた現地の警察は孫に拘留の処分を下したが、孫を可愛がる祖父の猛反対でその処分がやむを得ず取り消された。その反面、孫の方は自分の行為に対して何の反省もないだけでなく、約束を守らない祖父は憎むべき人だと堂々と主張している<sup>(2)</sup>。

(2) 恋愛の失意や結婚生活の不幸を両親のせいにして暴力を振るうパターン

実例3. 雲南省会沢県に住んでいる盛某はいつも妻を殴ったり、罵ったりしていた。妻が我慢できず家出してから、同居している父親が彼の暴力の対象となってしまった。息子の暴力を逃れるために、父親はある親戚を調停人に立て、家庭財産を分割して息子と別れて暮らしたいと申し出た。恨めしさと恥ずかしさで激怒した盛某は斧で父親を殺してしまった<sup>(3)</sup>。

実例4. 山東省楽陵市の臧某は食べることだけが好きで、怠け者で仕事嫌いの人である。妻は改めるよういくら説得しても彼が全く改めないで、絶望して実家に帰ってしまった。妻を家に戻らせるため、臧某はたびたび妻の実家に行き、義理の両親を殴ったり罵ったりして、甚だしきに至っては「殺してやる」と脅迫した。通報を受けた警察が臧某を逮捕して拘留処分を下した<sup>(4)</sup>。

実例 5. 陝西省漢中市勉県の劉某は 40 歳を過ぎてもなかなか結婚できない。何人かの女性と付き合ったことがあるが、家庭困窮のためすべて結婚するまでにはいかなかった。財産でさえ築きあげてくれない父親の無能で自分がこんなひどい目にあったと、劉某は心から父親を憎んでいた。2008 年 7 月に、広州市に出稼ぎに行った劉某はまた好きなタイプのある女性に出会った。ところが、その女性は彼の家庭の経済状況を知ったとたん、すぐに別れを切り出した。同年 10 月に、父親が自分にとって厄介な存在だと思い込んだ劉某はわざわざ故郷に戻り、71 歳の父親を殺して土に埋めた。事件が暴露された後、劉某は故意殺人罪で逮捕された<sup>(5)</sup>。

(3) 両親の財産を強要するために暴力を振るうパターン

実例 6. 西安の楊某は 80 歳で、その妻は 72 歳である。老夫婦は息子二人、娘四人を育てたが、長男は心臓病で夭折し、娘たちも相次いで嫁いだ。彼らは命のように末子を大切にしていた。1994 年に、老夫婦は全力で末子の結婚式を挙げた。しかし、当時、財力も十分でなく、花嫁の家に要求された結納の金額を全部準備できなかったため、花嫁の強い不満を買った。結婚後、花嫁は姑を見ても見ないふりをして老夫婦の存在をずっと無視し続けてきた。息子も両親に寄り付かず、嫁の言いなりになっている。1998 年のある日、ささやかなトラブルで、息子夫婦が老夫婦をひどく殴った。ショックを受けた老夫婦は警察に告訴したが、処罰を恐れる息子夫婦が謝罪したため告訴を撤回した。ところが、その後も、息子夫婦の態度はまったく変わらなかった。2010 年 8 月 30 日、姑と口論した嫁はまた暴力を振るい、80 歳の楊某に重傷を負わせた。これ以上は耐えられない老夫婦はついに裁判所に告訴状を提出した<sup>(6)</sup>。

実例 7. 2011 年 6 月のある日、武漢市のある居民委員会に傷だらけの余某夫婦が救助を求めに来た。「これらの傷は長男夫婦と孫からもらったプレゼントだ」と余某が悲しみ嘆いた。居民委員会の調査によると、余某夫婦には息子二人がある。彼の孫、即ち長男の息子がもうすぐ結婚する予定で、新婚用の住居を買うお金がなく、長男夫婦は両親の住宅を孫に譲ってほしいと要求したが、両親に断固として断られたため、怒った嫁と孫は老夫婦に暴力を加え負傷させた。暴力の理由について、長男が次のように弁解している。「商売の失敗で自分の住宅はすでに差押えられてしまった。それに、妻は交通事故で後遺障害が残っている。さらに、息子が結婚したくても結婚用の住居を買えない。自分の一家がこんな惨めな暮らしをしているにもかかわらず、両親が全く助けてくれない」と、両親への不満を話している<sup>(7)</sup>。

実例 8. 2009 年 2 月の蘇州市で、ある高齢者夫婦が家の中で殺された。警察が偵察の結

果、犯人は意外にも老夫婦の実の娘で、殺害の動機は遺産相続のためだった。その娘には離婚歴があり、今現在年下の彼氏と同棲している。生活困窮の彼女は、いつも両親にお金を要求したが、両親によく断られたので、ついに両親を殺害して早く遺産相続を受けたいと考えた。彼女が睡眠薬をご飯と混ぜ、両親に食べさせて寝かしてからナイフで両親を殺した<sup>(8)</sup>。

(4) 嫁が義理の両親との不仲で暴力を振るうパターン

実例 9. 河南省宜陽県に住んでいる 63 歳の李某は結婚後ずっと姑と同居してきた。性格が悪く、姑嫌いな彼女の義母に対する暴力は日常茶飯事になっていた。2009 年に、長年の虐待を受けた 93 歳の姑がこれ以上は我慢できず、首つり自殺してしまった。その後、李某が村人の匿名通報によって逮捕され、虐待罪で懲役 5 年に科せられた<sup>(9)</sup>。

実例 10. 四川省広安市に住んでいる 81 歳の李某は息子一家と同居している。息子が年中出嫁ぎに行っているため、家に残されたのは李某、嫁、孫娘 3 人だけだった。嫁である劉某が結婚してから家事をせず、毎日麻雀や賭博で遊んでいる。義父李某が一家の家事や農作業の仕事をすべて担っているにもかかわらず、ちょっとでも思い通りに行かないと、すぐ嫁に殴られる。苦勞して稼いだわずかなお金も嫁に強要に取り上げられた。2008 年 3 月 5 日、また嫁からの暴力を受けた李某は農薬で自殺してしまった。村人の通報を受けた警察が虐待嫌疑で劉某を逮捕した<sup>(10)</sup>。

(5) 麻薬吸飲者が両親や祖父母の説教に反発して暴力を振るうパターン

実例 11. 1998 年 6 月の西安市で、28 歳の孫による 82 歳の祖父の殺害事件が発生した。犯人である王某は両親の離婚により、1 歳未満の時からずっと祖父と一緒に暮らしてきた。祖父に溺愛された彼が、大きくなっても怠け者で遊んでばかりいて、定職に就かない。麻薬吸飲という悪習に染まったため一度警察に収容されたことがあるが、釈放された後も旧態依然である。麻薬を買うためにしばしば祖父にお金を強要し、くれなければ祖父を罵ったり殴ったりしていた。ある日、王某が麻薬購買資金のためにまた祖父を縛ってひどく殴った。その後、昏睡している祖父を殺害して、その遺骸を郊外の荒れ地に捨てた<sup>(11)</sup>。

実例 12. 2009 年 5 月に、岳陽市中級人民法院（地裁）は母親を故意に殺害した晏某に執行猶予 2 年付きの死刑判決を下した。1940 年生まれの晏某は 2004 年から麻薬吸飲の悪習に染まり始めてから、数十年間蓄積されてきた家庭財産はほとんど麻薬のために使ってしまった。彼と同居している母親が強い不満を持ち、親子間の喧嘩は絶え間なかった。最後の喧嘩で、晏某が縄で母親の首を絞めて死亡させた後、自ら派出所に出頭し、自首し

た<sup>(12)</sup>。

#### （6）両親との意見の食い違いで暴力を振るうパターン

実例 13. 天津市の孫某は一人息子で、両親にすごく可愛がられていた。成人になって、内向きで、人との付き合いが苦手な孫某はまったく仕事せず、毎日ネットゲームに熱中している。2007 年 12 月に、彼がネットカフェで小慧という若い女性に出会い、すぐ交際に入って、間もなく結婚したいと両親に申し出た。しかし、小慧が孫某より 4 歳年上で、前に交際した彼氏が今現在でも彼女の家族と同居しているため、孫某の両親は彼らの結婚計画に強く反対した。2008 年 10 月のある日、孫某は結婚をめぐって両親と激しく喧嘩の末に、両親を殺した。その後、彼は犯罪の現場を偽装して、自分の両親が知らない人に殺害されたと警察に通報した。結局、警察側に見破られ、直ちに逮捕された<sup>(13)</sup>。

### 1.2 身体的な虐待事件の特徴

筆者が集めた資料からみると、家庭内での高齢者に対する身体的な虐待事件には次のような八つの特徴がみられる。

第一に、家庭環境、社会風習および当事者自身の経済力、社会的地位の面においては、農村における高齢者と都市における高齢者が大いに異なるため、身体的な虐待事件が鮮明な地域特色を帯びている。事件の多くは農村地域で発生しており、都市部での発生率は割合に低い。農村では、虐待者の多くは息子と嫁で、孫および娘婿のケースもあるが、娘のケースはめったにない。農村における高齢者は一般的に息子を頼りとし、息子一家との関係は緊密であるからだ。これに対して、都市においては、男女平等意識が比較的普及しているために、娘家族と同居する高齢者が多いため、娘や娘婿が虐待者となったケースは珍しくない。

第二に、虐待者本人の資質をみると、ほとんどの人は荒っぽい性情、善悪をわきまえない、無責任、自己中心、楽なことを喜んで労を厭う、拝金主義などの特徴を持っている。虐待者が男性である場合、大体酒乱、麻薬吸飲、賭博というようなよくない品行の持ち主で、犯罪前科がある人も少なくない。一部の人は幼い頃から両親への過度依存に慣れて、両親が何時でも、何もかも自分の欲望を満足してくれるべきだと考えている。彼らの欲望を満足させない両親が、自然に彼らの暴力の対象となる。

第三に、虐待者の不良な資質の形成が、彼らの家庭環境とりわけ両親および祖父母の養育態度に大に関わっている。両親または祖父母の過度の援助と保護を受けた子供は、最終的に成長できず、自立できない大人になってしまう。逆に、小さい頃よく体罰や責め罵りを受けた人も健全な人格を形成できない。両親の暴力をよく受けた子供が、大きくなったら両親に暴力を振るう人物に変わったケースは珍しくない。特に親の言動が子供のモデルになり、将来像の方向付けにもなっているため、自分の両親を尊敬せず、暴力を振るわせた親は子供に悪いモデル



を提供して、老後になると、自分の罪惡の結果を自分が受けるようになってしまう。

第四に、嫁による姑への身体的な虐待事件の頻発は、息子の親不孝あるいは軟弱無能と密接に関係している。親不孝の息子は親よりも自分の嫁や子供の利益を大事にして、嫁姑の關係がぎくしゃくした場合、常に嫁の味方をし、嫁と一緒に自分の両親に暴力を振るう。軟弱無能な息子は恐妻家であるため、妻の言いなりになりがちで、姑に暴力を振るう妻の行動を常に見ても見ないふりをして、制止することもできない。

第五に、伝統社会から近代社会への転換に際し、特に女性の地位の向上は、嫁による姑への身体的な虐待事件の社会的背景である。中国の伝統社会において、嫁は夫及びその家族に従属する「弱者」で、常に姑の虐待の対象であった。近代社会になると、女性の経済的社会的な地位の向上に伴って、嫁がすでに家庭の中の「弱者」から「強者」に変わった。農村男性とりわけ貧しい家庭の男性の結婚難は、嫁の家庭における主導的地位をさらに強化させた。これは嫁が被虐待者から虐待者に変身した客観的な原因で、嫁自身の資質の悪さ、特に荒っぽい性情とエゴイズムがその主観的な原因だと考えられる。

第六に、被虐待高齢者自身の我慢が虐待事件の発生を助長している。我慢の原因は高齢者の二つの配慮に由来する。まずは家庭内の醜いことを外に出したら、家族全員の名誉や面目が損なわれることを心配している。次には実の息子や娘または孫が、自分の起訴で法的処罰を受けることを懸念している。我慢しきれない高齢者はたとえ訴訟の手段を採っても、虐待者である子供がちょっと反省の意を表したら、すぐその悪行を許して訴状を取り下げる。高齢者のこのような自虐的忍耐とわが子への溺愛は、家庭内での高齢者に対する身体的な虐待事件の隠蔽性と長期化をもたらした。

第七に、第三者が家庭内部のことに介入しにくいことが、軽微である虐待事件を漸次重い傷害事件や殺人事件に拡大した要因の一つだと考えられる。中国には、古くから「仕事がよくさばける役人も家事を断ずることは難しい」という言い回しがあり、複雑な原因を持つ家族間トラブルに対し、外部の人はあまり口をだしたがない。その上、加害者の多くはもともと非道横暴な無頼漢で、彼らの暴力の対象が親だけではなく、その親に同情したり、助けたりする人をも含めている。災禍を招くことを恐れて、高齢者の親族や近所の人および村の幹部たちは、虐待事件に目をつぶって余計な世話をしたくない。外部からの介入と社会的圧力の欠如が、加害者の暴力行為の長期化につながっている。

第八に、法律の不備により、同様の虐待行為に対する処罰もまちまちで、特に高齢者の死亡に至っていない事件への処罰の軽さは、法律による虐待者を威嚇する目的に達していない。中国には、高齢者虐待に特化した法律はまだ存在しない。一般的に、被虐待高齢者が受けた傷害の程度により、「刑法」や「社会治安处罚条例」に基づいて処分を下す。直接的に高齢者を殺害した虐待者について、厳しい刑罰を下し、最高死刑判決もできる。間接的に高齢者を死亡させた虐待者に対する処分は様々で、5年刑罰を科せられたケースもあるが、死亡した高齢者の

お墓の前で謝罪しただけで事を済ませるケースもある。「重傷」程度の事件については、2年以下の禁固刑もしくは拘留の処罰しか課せられない（「刑法」虐待罪による）。「軽傷」程度の事件に関しては、警察側は仲裁に入って事を済ませるケースがほとんどで、重くても「警告」「罰金」もしくは5日から15日の行政拘留という処分しか下さない（「治安管理処罰法」による）。

## 2. 経済的な虐待

経済的な虐待とは即ち扶養義務を持ち、かつ経済力を持っている者が、労働能力を喪失し、経済的に自立できない高齢の両親に扶養義務を果たさないことを指す。農村ではよくみられる事件で、都市では比較的に少ない。経済的に自立できない高齢者が農村には多く、都市部には少ないからだ。社会保障水準の地域格差、ならびに農村における伝統的な分家慣習が、このような現象を生じさせた主な原因だと考えられる。

近代的な社会保障制度は、一国の経済発展に貢献する公務員と近代工業セクターの労働者を対象として導入される場合が多く、中国においても例外ではなかった。1949年に中華人民共和国が成立してまもなく、1951年に「労働保険条例」が制定され、都市部において、企業の従業員及び国家機関の公務員に対する年金給付、医療給付等が制度化された。その後の中国の社会変動に伴い、さまざまな問題にであったが、この制度は崩壊せず、対象者への年金給付と医療給付がずっと続いてきた。これに対して、農業従事者の老後の生活保障が長い間、伝統農業社会の慣習を継続し、土地を付与されること以外は、子供等の親族に扶養してもらうことが中心であった。農民を対象とする年金制度は1991年から一部の地域で展開されていたが、制度上の欠陥と給付水準の低さにより、加入率は非常に低かった。2009年からやっと新たに新型農村年金制度の試行が始まった。農民に対する医療保険については、1950年代末から1970年代末までには、人民公社という生産集団を中心に、住民間互助共済型の「合作医療制度」が実施されていたが、1980年代初期になると、人民公社の解体に伴って衰退の局面を迎えてきた。新型農村合作医療制度の再建は2003年以後のことである。農村地域における社会保障制度の確立が都市地域より遥かに遅れたため、無年金、無医療保険の高齢者は圧倒的に多い。

その上、息子の結婚により家産を分割するという伝統的な分家の慣習は、高齢者の経済状況をさらに悪化させている。農業だけで生計を立てる農民はもともと収入が低く、財産の貯蓄も少ない。数人の息子の結婚により家産を分割した後、年老いた親に残された財産がわずかで、一室の部屋でさえ残されていない高齢者もいる。財産を持たず、働く体力も喪失した高齢者の生活は子供に頼るしかない。

以上のような社会的文化的な要素は、農村地域における経済的な虐待事件が多発する主な背景だと思う。



マスコミに報道された農村での経済的虐待事件には、次の五つの特徴がみられる。

第一に、子供が多いほど、両親の扶養が難しくなる。現在65歳以上の高齢者のほとんどは1970年代前に結婚している。当時の中国はまだ厳しい計画出産政策を実施していなかった。農村の人々は皆「子供が多ければ晩年の幸福も多い」と信じ、夫婦二人で子供5人以上を育てたのはごく普通のことであった。しかし、老後になると、子供が多いほど、老後生活の保障が危なくなるという現実と直面している。子供たちは親扶養を重荷と考え、誰でも多く担いたくないため、常に互いにおしつけあったり、口実をもうけて責任逃れしたりして、親扶養の責任分担をめぐるトラブルをうまく解決できない場合、一緒に親扶養を放棄する恐れもあるからだ。

第二に、分家によって生まれた親子間のトラブルは、いつも親扶養を拒否する子供の口実になる。農村の慣習では、子供の結婚を手助けすることが親の責任であるが、しかし、息子と娘に対する待遇には落差がある。娘の結婚には、親は嫁入り道具を送るだけで済む。息子の結婚の場合には、親は新しい家庭が使用する住宅を用意するだけでなく、自分の財産の一部を分割して分け与えなければならない。もし息子が複数いる場合、長男、二男、三男など、順次に最後の息子が結婚するまで、結婚ごとに分家を一回行う。最後の分家を済ませて、親はある息子と同居するか、または夫婦二人だけで暮らすようになる。ある息子の結婚のために分家を行う際、親はこの息子の要求をできるだけ満足させると同時に、他の息子への分け前を十分に残すことを配慮しなければならない。子供たちの将来の幸福ばかり考え、自分の家財をすべて子供たちに分割しきって、最後に自分に一室の部屋でさえ残さない親もいる。その反面、結婚を機に、あの手この手と工夫をこらして、できるだけ親から多くの財産を分割してもらいたい子供は少なくない。実際のところ、家庭の財力の制約や親の主観的な判断により、息子たちの要求をなにもかも満足させ、かつまったく均等的に財産を分与することは非常に難しいことである。したがって、分家による兄弟間の軋轢や親子間のトラブルがよく生じる。親に偏愛されて家財を多くもらった兄弟が、親扶養の責任をもっと多く担うべきで、親に愛されておらず、もらった家財も少ない自分が、親扶養の義務を軽減すべきだ、という主張はしばしば親扶養を拒否する口実になる。家産分与の対象にならない娘の方は、自分には親扶養の義務がないと考えている。

第三に、息子の夫婦関係の悪化は親扶養に影響を及ぼす。1980年代から、中国の農村地域では出稼ぎブームを形成していた。20代から40代までの既婚男性がこぞって外へ出稼ぎに行ったため、多くの村には老人、女性と子供だけが取り残されている。出稼ぎに行った夫は視野が広がるにつれて、人生観や価値観の変化が生じ、故郷に残された妻との間に感情的に齟齬が生まれやすい。また、長期の別居生活が夫婦感情を冷淡にさせ、夫婦関係の破綻につながりかねない。夫婦間にもつれが生じたら、財布の紐を握っている妻は往々にして義理の親に提供すべき生活費や食料などをカットしてしまう。

第四に、高額な医療費による扶養紛争が多発している。農民を対象とする医療保険の普及が

遅れ、かつ給付率が低いため、高額な医療費を払えない高齢者がたくさんいる。その際、子供が親の医療費を援助したいけどお金を持っていない場合、あるいはお金を持っていても出たくない場合、親は病気の治療を諦めるしかない。高齢者が重病に罹った場合、治療を続けるべきかどうか、子供の間に医療費の分担をどう分け合うべきかなどをめぐって、家族間の紛争がよくおこる。

第五に、父と母を分散して扶養することによって扶養者間の紛争を引き起こす。一部の農村地域には、親扶養の負担を公平に分けるために、親の意思を顧みず、高齢になった父と母を別々に二人の息子の家庭に分散して扶養する慣習がある。このようなやり方は二つの結果を招く。まずは高齢者に精神的な苦痛を与える。年寄りにとって、そばに伴侶がいることは最もよい精神的な安定剤で、無理に別居させる老人は孤独になり、苦悶や焦燥という不安定な精神状態に陥りがちである。次は、兄弟間の紛争を招きかねない。つまり、一方の親が先に死亡して、他方の親が長生きする場合には、長生きする親の扶養者が損をしたと感じ、再び他の兄弟にその扶養責任を分担してほしいと要求すれば、兄弟間のトラブルを引き起こしやすい。兄弟間の紛争がうまく解決できず、その親が家から追い出されて、行くところなくなるケースもよくある。

さらに、次のような風習は現行法律の規定に違反するにもかかわらず、農村地域では社会通念として広く認められ、高齢者の生活保障を脅かしている。

(1) 結婚した娘には親扶養の義務がない。

この風習は昔から形成された男性を中心とする父系家族制度にも大いに関わっている。この制度のもとでは、息子は家の跡継ぎとして親の財産を相続すると同時に親を扶養する義務を負う。これに対して、娘は大きくなると他姓の嫁となるため、親の財産を相続する権利もなく親を扶養する義務もない。しかし、1950年に制定された「婚姻法」はすでにこの制度を否定して、男女平等という原則に基づいて、「子は親を扶養する義務がある」(第十三条)「親と子が互いに遺産を相続する権利がある」(第十四条)と明確に定め、男性と女性に同様な権利と義務を賦与した。1980年に修正された「婚姻法」にはさらに「子が扶養義務を履行しない場合、労働能力のないあるいは生活困難の親は、子に扶養費を要求する権利がある」(第二十一条)という条文を付け加えた。つまり、法律上では、子の親に対する扶養義務は、男女の別、結婚の有無に関係なく全員あるということである。しかし、現在になっても、一部の農村地域では依然として「お嫁に出した娘は放り出した水の如くである」という昔の観念を固持し、娘とりわけ既婚の娘に親の財産相続権を認めないと同時に、娘に親を扶養することも要求しない。

(2) 子は再婚した親を扶養する義務がない。

多くの子供の考えでは、配偶者の死亡または離婚により独身になった親が再婚すれば、自分と無関係の新しい家庭をつくることを意味し、その老後の扶養も自分と関係がない。したがって、親の再婚を口実にして親の扶養を拒否した子供は少なくない。しかし、「婚姻法」の第三

十条には「子は父母の婚姻権利を尊重し、父母の再婚及び結婚後の生活を妨害してはならない。子の親に対する扶養義務は、親の婚姻関係が変わっても果たすべき」と規定している。

(3) 孫の面倒をみない親については、子は扶養しなくてもよい。

農村の慣習によれば、親は子供の結婚を手助けてから、息子の子供すなわち孫の面倒をみる責任もある。息子が複数いる場合には、親は長男の子供から二男や三男の子供へ、順番に均等に孫たちの面倒をみなければならない。親はほかの息子の子供の面倒ばかりをみて、自分の子供の面倒をあまり見ていないことを口実として親扶養を拒否する人はよくみられる。しかし、現行の法律によれば、父母が健在でかつ扶養能力を持っている孫については、祖父母は後見人になる必要がなく、扶養する義務もない（「婚姻法」第二十八条）。

(4) 親の財産を相続しない子には親扶養の義務がない。

農村地域では、親の財産に対する相続権を放棄したという理由で、親扶養を拒否する現象はよく現れる。しかし、現行の法律によれば、財産相続権が公民の権利であり、父母と子は互いに財産を相続できる。子は自らの意志で相続権を放棄することができるが、これによって親に対する扶養義務を果たさないことができない。「高齢者權益保障法」第十五条では、「扶養者は相続権の放棄またはその他の理由で扶養の義務を拒否してはならない」と明確に規定している。

法律の遵守を基本原則とする現代社会では、法律の規定と異なる社会の慣習がある場合、その慣習が法律に基づいて変化すべきだと思うが、しかし、長い歴史の中で形成されてきた社会慣習を変化させるのは非常に困難なことで、特に伝統勢力が強い農村社会では、社会慣習より法律遵守を尊重するような意識形成にはなお相当な時間がかかるだろうと考えられる。

### 3. 高齢者の財産権に対する侵害

高齢者の財産権に対する侵害とは、親族が高齢者の意思に背き、彼らの財産をせびったり、詐取したり、または不当に占有したりすることを指す。親の脛かじりおよび高齢者の財産を不当に占有することが、その主な現れである。

#### 3.1 親の脛をかじること

親の脛かじりとは、子供が大人になり、経済的に依然として親に依存し独立できない現象である。親子関係が非常に緊密な中国において、どこでも見られる現象であるが、親の意思に背いて無理矢理に強要することは虐待行為となる。虐待者の特徴をみると、次の五つの類型に分けられる。

(1) 働く能力がありながら、職業に就く意思を有せず、経済的収入がなく、全面的に親に頼る者。

(2) 職業に就き、正常な経済的収入がありながら、贅沢浪費のため収入が支出に追いつかず、

部分的に親に頼る者。

- (3) 親の財力や生活状況を顧みず、結婚を機にして親に住宅や車、お金などを過度に要求する者。
- (4) 妻子を持つ既婚者で、正常な経済的収入がありながら、相変わらず親の家に居座り、一家の生活費をすべて親に頼る者。
- (5) 妻子を持つ既婚者で、正常な経済的収入があり、親と別居しても、常に何らかの口実で親に金銭や物品を要求する者。

親の脛かじりは主に都市家族で発生しているため、年金だけで生計を立てている高齢者の生活の質に大いに悪影響を与えている。年を取った高齢者には複雑な気持ちがある。一方で、父母となる者は誰しも子供の幸せを願っており、できるだけ子供の欲求を満足させたい。他方において、子供の親孝行を享受すべき年になった一老人として、他の老人が子供からの経済的な扶助や精神的な慰めを享受しているのに、自分が子供からもらうのはきりのない要求ばかりで、不満と恨みの感情が自然に湧き起こり、子供に対する嫌悪感が生まれかねない。子供のエゴイズムは親に経済的なプレッシャーだけでなく、つらい思いをさせ、大きな精神的なダメージをも与えている。

上述の親の脛をかじる者の中に、安定的な経済収入を持っている人も、全く収入のない人もいる。妻子持ちの既婚者も、未婚者もいる。相対的にいえば、30歳を過ぎ、職業に就く意思を有せず、かつ経済的収入のない子供が親に与える圧力と傷害は、最も大きい。中国の社会通念では、30歳は結婚し、職業を持ち、独立生活できる年を意味する。30歳を過ぎても、結婚もせず、職業も持たず、親から独立できないことは、人生の失敗の証となる。子供が失敗すれば、子供の出世を望んでいる親の希望も水泡に帰したことになる。しかも、年を取った親が失望しながら大人になった子供を続けて扶養せざるを得なくなる。

親依存症になっている人には共通な人格的欠陥がある。そこには逸楽にふけ苦勞を厭うこと、無責任、自己中心的、人付き合いが苦手、現実逃避、引きこもりがち、ちょっとした挫折ですぐ自暴自棄になることなどが挙げられる。幼少期の成長環境、とくに家庭教育と学校教育の問題は、このような人格の形成に大に関係している。

家庭教育の問題は二つの方面に現れている。一つは過保護の問題である。子供は幼少期において親から過剰な保護を受けると、大人になっても心理的離乳を達成できず、社会的適応能力が低いと、責任感のない人になりやすい。ある人はもともと学歴が低く、専門的な技術も持たないにもかかわらず、肉体労働を厭うため、無職の状態に甘んじている。ある人は一旦就職したが、職場に適応できず、人とのコミュニケーションも苦手で、細やかな挫折ですぐ退職して家にこもるようになってしまう。親が子供に過大な期待をかけることは、もう一つの問題である。親が子供のために設計した理想は高すぎると、子供が自分自身の能力や社会の現実を客観的に理解できなくなる。ある人は高給の仕事や社会的地位の高い職業だけに興味を持ち、一

般の仕事が気に入らない。ある人は企業家になることを強く希望しており、親の援助でいろいろやってみたが、大体失敗で終わったにもかかわらず、普通の従業員として他人の下で働きたくない。高邁な理想を持ちながら、30歳を過ぎても無職、無収入で親にすがって暮らす子供を生み出したのは、まさに親であるといっても過言ではない。

学校教育の問題に関しては、まず知力教育を重んじ、人格の養成を軽視する受験教育が取り上げられる。特に1980年代と1990年代では、どのようにして大学、特に有名大学に入ることが、幼稚園から高校までの教育の主要目的となり、学生の責任感、独立性、挫折に耐える能力などの資質の養成が軽んじられていた。次に、長い間、大学の授業には職業指導が含まれていなかったため、学生は学校を卒業したら社会や職業に適応しにくい。中国の大学進学率は1991年のわずか3.5%から急速に2011年の25%に上昇し、すでにエリート教育から大衆教育に変わった。エリート教育の時期において、卒業大学生は貴重な人材として、職業の選択肢が多かった。大衆教育の段階に入ると、大卒の学歴を有しても失業する可能性がある。このような社会変化に適応できず、相変わらずエリートの姿勢で仕事を選び好みするのは、一部の大学卒業生がなかなか就職できず、あるいは就職しても頻繁の転職により、安定した収入を手に入れることができない主な原因である。

安定的な経済収入がありながら親の脛をかじる行為は、親の子供に対する溺愛と子供の極端なエゴイズムとの相乗作用で生まれた結果である。「外に出ると友に頼り、家にいると父母に頼る」という中国の諺に示されているように、子供が父母に頼ることはずいぶん昔からの伝統である。たとえ30歳を過ぎ、妻子を持つ既婚者の中でも、親の脛かじりが当たり前のことだと考えている人は少なくない。自分の親だから、金銭と品物をせびったり、自分の子供の面倒をみてもらったり、家事の代行を要求したりすることなど、躊躇もせずやり放題である。ところが、親がいくら金品や労力を費やしても、子供から感謝されるどころか、子供の恨みや暴力を招く場合もある。我慢しきれない親は、法律に訴えて自分の權益を守らざるを得なくなる。

実例 14. 河南省鄭州市に住んでいる趙某は2000年に結婚した時、独立の住宅を持たないため、親と同居してきた。趙某夫婦の生活費や家事など、何もかも両親に任せているが、細やかなトラブルで常に両親を罵ったり殴ったりする。家庭の仲を維持するため、両親の方はずっと我慢してきたが、趙某夫婦はエスカレートする一方である。たまたま両親を訪ねてくる他の兄弟や親戚、友だちも罵倒の対象となった。2007年に、絶望した両親が法律に訴え、趙某夫婦を自分の家から引っ越すことを要求した。同年9月、裁判所は趙某夫婦にその両親の家から出ることを命じた。裁判官が次のように説明している。民法によれば、経済的収入がない学生や独立生活できない障害者を除き、成人になった18歳以上の人は、すでに完全な民事能力を有するので、父母側の扶養義務も終了する。趙某夫婦が親の意思に背き、親の住宅に居座り、経済的にも無理矢理に親に依存している行為は、すで



に親の財産権の侵害となっている。彼の両親が法律を通して自分の権益を守ることは当然のことである<sup>(14)</sup>。

この判決が初めて法律に基づいて親の脛かじり行為を禁止したため、社会に大きな反響を及ぼし、裁判所擁護一辺倒の世論になっている。判決により趙某の親子関係がさらに悪化する恐れもあるが、しかし、趙某夫婦およびその両親の将来の生活を考えると、これが適切な判断だと多くの人は考えている。

親の脛かじり問題への取り組みとして、一部の地方政府は法律の制定に力を入れている。代表的なのは2011年1月21日に改正し、3月1日に実施された「江蘇省高齢者権益保障条例」である。その中の第十五条には「独立した生活能力を持つ成年子女は高齢者に経済援助を要求してはならない。高齢者はこれを拒否する権利がある。子女及びその他の親族は仕事がないことやその他の事由をもとに、高齢者の財産をだまし取ったり、かすめとったり、あるいは強制的にもらい受けたりしてはならない」と定め、親の脛かじりが違法行為で、高齢者にはこれに対する拒否権があると強調されている。

江蘇省の立法には賛否両論がよせられている。

賛成者によれば、社会には苦勞を嫌がり、向上心のない若者が多く存在しているため、立法が必要だ。現在の社会では、競争が激しく、仕事上のプレッシャーも大きいので、若者の生存は確かにたやすいことではない。しかし、これを親の脛かじりの口実にしてはいけない。社会の道德規範が不道德な行為を拘束できない場合、法律によって治めるのがあたりまえのことだと彼らは考えている。

反対の立場に立っている人は、この法律の実効性について疑問を持っている。「自活能力」の定義とは何か、どの程度の親の脛かじりが違法行為になるのか、罰則とは何かについて、この法律が全く触れていないからだ。反対者は次のように立法の擁護者に反論している。中国の社会現実を見ると、親の脛をかじる人の多くはまさに「自活能力」を持たないことを口実として親にすがっており、多くの親も子供に対する経済的援助や家事代行などが自分の責任と義務だと考えている。したがって、社会慣習、道德規範、法律規定という三者間の区別をはっきりさせなければ、立法の凡庸化をもたらし、法律の威厳を損なう恐れがある。親の脛かじり行為はあくまで道德規範に関わる問題で、説得と教育によって解決すべきである。わざわざ法律を制定してこの行為を禁止することは、法と道德の区別を曖昧にさせ、親子関係のさらなる悪化をもたらすしかない。特に、親と子供の関係は血縁や感情など複雑な要素が絡み、単純な経済関係ではない。たとえこのようなことに遭遇しても、多くの高齢者はたぶん我慢を選び、法的手段を選ばないだろう。将来万が一病弱になったら子供のケアに頼るしかないためである。総じていえば、法律により親の脛かじり問題を解決する方法は、中国の社会慣習に背き、中国の国情にも合わないものだと、反対者は力説している。



### 3.2 高齢者の財産を奪い取ること

親族が欺瞞、強要などの手法で高齢者の財産を奪い取る事件は目新しいことではない。近年目立ったのは、高齢者の不動産所有権に対する侵害である。住宅の私有化、都市開発の加速化と住宅価格の急上昇がその社会的背景である。高齢者の不動産を奪う手法として、主に次の四つが挙げられる。

#### (1) 親の住宅購入の協力を通して、親の所有権と居住権を奪う手法

経済改革前の中国では、住宅の商品化が否定されていたため、企業などの職場が従業員に安い家賃の社宅を提供していたので、個人では住宅を買う必要もないし、買う機会もなかった。経済改革後、1990年代から本格的に住宅の商品化が推し進められ、すでに従業員に割り当てられた社宅についても、従業員に買わせる政策が制定された。その際、経済改革前の低賃金政策や従業員の企業への貢献などを考慮し、社宅の販売価格が市場で販売されている住宅よりずいぶん安く設定され、社宅の居住権を有する人だけに購買権が与えられた。お金を多く持たず、すぐに住宅価格の全額を払えない高齢者が、経済力を有する子供に頼んで自分の代わりに住宅価格の一部あるいは全額を出資したケースもよくあった。問題なのは、住宅の所有権を登記する時、出資した子供が自分の名前だけを記入し、その後、これを根拠として親を住宅から追い出すことである。このようなことに遭遇した場合、高齢者は住宅の所有権を喪失しただけでなく、住宅の居住権も奪われてしまう。

実例 15. 張某夫婦はもともと国有企業の従業員で、息子3人を有する。1988年に企業から3LDKの住宅が割り当てられ、1998年の社宅改革を機に所有権を買った。その際、資金不足で末子が4万元を出資し、不動産登記簿には末子の名前だけが記入された。今現在、末子はこの住宅が自分だけのもので、両親と二人の兄に関係がないと主張しているの、絶え間ない家族の悶着が昔の楽しく睦まじい家族関係に取って代った<sup>(15)</sup>。

#### (2) 高齢者の信頼を利用して密かに不動産所有権を改ざんする手法

個人が不動産を所有することは、1978年の経済改革以降、新たに現れた事象である。社会ではまだ管理経験は不足し、また所有者自身の物権意識も低いため、意地悪い親族はこの隙間を利用して、こっそりと不動産の所有権登記を改ざんすることにより高齢者の不動産を乗っ取っている。

実例 16. アパートの8階に住んでいる李某は骨折して、行動が不便になったため、8階の住居を売却して1階の住宅を買い替えることを決め、手続きはすべて同居している末子に任せた。ところが、その末子は不動産登記を行う際、自分の名前だけを記入した。その後、真相がわかった李某は自分の財産を取り戻すために、やむを得ず末子を起訴した<sup>(16)</sup>。

実例 17. 2006 年に、周某の居住地域が都市改造の対象となったため、移住する住民に新しい住宅を割り当てられ、補償金も払われた。100 平米あまりの古い住宅を有する周某が 80 平米の新宅および十数万元の補償金をもらうことになり、複雑な手続きに頭が痛い彼はすべてのことを末子に任せた。しかし、末子が新宅の登記簿に自分の名前だけを記入し、受領した十数万元の補償金も自分のポケットに入れて、全く父親に渡さなかった<sup>(17)</sup>。

実例 18. 徐州市の郭某は夫が早く他界したため、女手一人で子供 5 人を養育した。子供たちは相次いで結婚し、間もなく孫の世代も誕生した。孫の中、1981 年に生まれた長男の息子が最も郭某に可愛がられている。晩年の彼女は 2 階建ての 160 平米のアパートを賃貸に出して生計を立てている。家賃収入の一部だけを自分の生活費とし、残りのほとんどはこの孫のために使ってしまったため、他の子供や孫の強い不満を買った。2007 年 3 月に、最愛の孫は郭某に新しい住宅を買うために彼女本人のサインが必要だと言い、彼女を徐州市不動産管理局に連れて、ある文書にサインさせた。二年後の 2009 年 8 月に、郭某は都市改造のための移住通知を受け取ってはじめて、二年前にサインした文書が移住の同意書で、そのために補償された新しい住宅や補償金をすべて孫が受領したことを知った。居場所と生活の経済的保障をすべて失った 82 歳の彼女は仕方なく、弁護士を雇って最愛の孫を訴えた<sup>(18)</sup>。

### (3) 老後の面倒をみることを約束して高齢者の財産を騙す手法

高齢者として、老後に対する不安は誰もが持っている。その不安を取り除くため、元気うちに、老後の面倒をみることを約束した親族への財産の贈与はよくあることである。しかし、もし子供が約束を守らなければ、高齢者は財産の損失と精神的な打撃を共に受けるという窮境に陥りかねない。親族が高齢者の老後への不安を利用して彼らの財産を騙し取る事件がしばしばマスメディアに報道されている。

実例 19. 70 代の黄某夫婦は一人娘がいる。2003 年に嫁婿が毎年彼らに 6000 元の扶養費を提供すると同時に、日常生活の面倒もちゃんとみるという内容の書類を書いたため、黄某が不動産一か所を娘夫婦に贈与した。最初の何年間は、約束が確かに守られていた。しかし、近年になると、嫁婿の態度が豹変して、日常生活の面倒をみるどころか、約束の扶養費でさえ払わなくなった。老後の生活を維持するため、途方にくれた黄某夫婦は裁判を通して、不動産の贈与を撤回した<sup>(19)</sup>。

実例 20. 石家荘市の謝某はすでに 80 歳になり、息子 3 人、娘 2 人がいる。夫が他界してから、彼女はずっと三男と同居して、三男に扶養されていた。その代わりに、謝某は自

分所有住宅を三男に贈与した。ところが、5年前、三男が不動産名義を変更した後、家が狭いという理由で彼女を外借家に住ませ、生活費も払わなくなった。最近、その借家が都市改造によって取り壊されたので、住むところがない彼女は屋外で寝ざるを得なくなった。しかし、5人の子供には母親を自宅へ迎える人が一人もいない。三男は家が狭いと強調し、他の4人の子供は母親が住宅を三男だけに贈与したことに強い不満を持っているからである<sup>(20)</sup>。

#### (4) 暴力で親の住宅を強奪する手法

欺瞞の手法と比べて、暴力で親の住宅を強奪する手法はさらなる悪質な犯罪だと言える。

実例 21. 70代の劉某夫婦は一生苦労して二階建ての家を造り、独立の住宅を持たない息子一家と同居している。二階の二つの部屋に息子夫婦と孫が住み、劉某夫婦が一階に住んでいる。息子の長男も成人し、婚約したが、婚約者の持家要求に悩んでいる。その問題を解決するため、息子夫婦は自分たちが一階に引っ越し、二階を長男の結婚新居にしようと秘かに計画していた。ある日、劉某夫婦が娘の家族を訪問に行った。息子夫婦はすぐ一階にある両親の家財道具や衣服などを外に出して焼却し、自分が一階に引っ越し、二階の部屋を長男の結婚新居としてリフォームした。その後、娘の家から戻った劉某夫婦が家に入ることも拒否された。強いショックを受けた劉某夫婦は共に病気で倒れた。劉某の娘やコミュニティの幹部たちが何回仲介しても解決できず、やむを得ず裁判所に訴えた。あまりにも悪質な事件で、訴状を受理した裁判所がすぐ劉某の息子夫婦に「住居を両親に返せ」という判決を下した。その息子夫婦が判決に従わないため、裁判所が警察を派遣し強制的に執行を行った<sup>(21)</sup>。

不動産所有権侵害のほか、次のようなことも高齢者がよく遭遇する財産被害である。

#### (1) 土地収益が不法に親族に占有されること

中国は土地の私有を許さないが、土地の使用権を持つことができる。長い間、農民が中国の年金制度の対象外とされたため、使用権を有する土地の収益が彼らの老後の主要な経済収入となっている。特に2000年以後、経済開発のブームが多く農村地域に波及し、企業の借用によって生まれた土地の収益がはるかに農業経営の収益を超えている。これに伴い、高齢者の土地収益が親族に不法に占有される事件も多く発生するようになっている。

#### (2) 老後の面倒をみる代わりに親に財産の分割を強要すること

衰弱して要介護が必要となった高齢者、特に伴侶の死亡によって孤独に陥った高齢者はこのようなことによく遭遇する。彼らは子供に生活ケアの提供を求める際、子供はまず彼らに財産分割という前提条件を打ち出す。親から相続できる財産を繰り上げて手に入れたいからである。

要求を満足してくれなければ、親に生活ケアや介護を提供しない。

（3）親の財産処分に干渉すること

親の財産を自分のものとみなす子供が、よく親のお金の使い方や財産の処分をチェックしたり干渉したりするため、高齢者は自分の意思による買い物や日常の答礼と贈与などができなくなる。意地悪い子供が親の贈与文書や遺言書を偽造し、親の財産処分権を奪う事件もしばしば起きている。

（4）親の再婚を機に財産の分割を強要したり強奪したりすること

親の再婚があかの他人と新しい家庭を作ることの意味し、親の財産もあかの他人のものになる可能性がある。したがって、子供が親の再婚を機に財産の分割を強要し、応じてくれなければその再婚を妨害することはよくみられる光景である。子供の要求を無視して再婚した親は、子供と絶縁状態になったり、子供に暴力で財産が強奪されたりすることも珍しくない。この問題については次稿で、改めて論じたい。

マスコミに発表された事件をまとめて見ると、高齢者の財産を奪ったのはほとんど実の子供で、被害者の多くはアパート一か所と年金だけで生計を立てている都市における高齢者である。農村には資産を持っている高齢者が少ないからである。また、高齢者の中では、女性、配偶者を失った人、再婚を望む人が子供からの財産侵害を受けやすい。女性高齢者の不動産知識の欠如、配偶者喪失の高齢者の孤独、再婚を望む高齢者の子供に対する配慮は意地悪い子供に機会を提供するわけである。高齢者に対する財産の侵害が多発する原因をさらに探してみると、加害者である子供のエゴイズムや心がけが悪いことは言うまでもないが、高齢者自身にも重要な責任があることを指摘しなければならない。まず、多くの高齢者は自分の財産が遅かれ早かれ、結局子供に残すものだと思うので、子供に対する「防犯」意識を有せず、親の脛かじり行為を放任するだけでなく、自分の貯金や不動産についても、生前早くも子供たちに分与してしまった人もいる。次に、自分の財産が子供に取られても、その真相を隠し我慢する高齢者は多く、被害の事実を公にして、裁判などを通して自分の權益を守る高齢者は非常に少ない。なにもかも子供の利益を最優先に考える親心が、道德欠如の子供を作りだただけでなく、自分の生活の困窮を作り出したのは一目瞭然である。したがって、高齢者にとって、楽しく、安心できる、ゆとりある老後を送るためには、まずは物権の意識をしっかりと持ち、「老後は子供に頼り」から「老後は自分に頼り」という意識転換を行わなければならない。

注

（1）黄学成《不孝独儿终受法律制裁》，当代贵州杂志社《晚晴》2007年第二期。

（2）“八旬老人因赡养纠纷被孙子打瞎右眼”，《现代快报》2011年9月13日。

（3）区鸿雁“农村赡养：何时不用上公堂”，《乡镇论坛》2004年第4期。

（4）“妻子离家出走 男子殴打岳父母”，德州新闻网 [www.dezhoudaily.com](http://www.dezhoudaily.com) 2010年6月22日。

- (5) “男子娶不上老婆怨家贫 将古稀老父活活打死”，《西安晚报》2009年1月1日。
- (6) “结婚时四千元彩礼没给全 儿子媳妇虐待公婆达十年”，婚姻法律网 [www.lawtop.org](http://www.lawtop.org) 2010年10月9日。
- (7) “七旬老妇因未支持长孙买婚房被打成骨折”，《武汉晚报》2011年6月12日。
- (8) “女儿为继承父母财产 安眠药拌饭杀害双亲”，《扬子晚报》2009年3月1日。
- (9) “93岁婆婆不堪打骂自缢身亡 63岁儿媳虐待老人获刑5年”，中国法院网 [www.chinacourt.org](http://www.chinacourt.org) 2009年9月11日。
- (10) 潘雪琴，仇电波 “虐待老人法不容 自酿苦果进班房”，中国检察网 [www.cnjccn.com](http://www.cnjccn.com)，2008年4月14日
- (11) 郭德全 “五十例老年人自杀及他杀典型案例”，《陕西老年学会——新教化与社会主义精神文明建设建设探讨讨论会论文集》2004年。
- (12) “逆子残忍勒死亲母 怕其没死上吊尸体”，湖南在线 [www.huanqiu.com](http://www.huanqiu.com) 2009年5月14日。
- (13) “男子因父母反对自己婚事杀死双亲”，《城市快报》2008年10月8日。
- (14) 张胜利，李亚男：“河南一对夫妇赶走子女 法官：‘啃老’是侵权”，《人民法院报》2007年9月21日。
- (15) “‘老窝’被占，到哪里去安身？”大事网 [dsw.yagm.com.cn](http://dsw.yagm.com.cn)，2009年2月8日。
- (16) 注15と同じ。
- (17) 注15と同じ。
- (18) “孙子偷占奶奶房产 82岁老太无奈住公厕”，《扬子晚报》2010年4月28日。
- (19) “老人望女婿送终赠房产 对方得手后翻脸不认”，《扬子晚报》2011年7月20日。
- (20) “80岁老太因5名儿女不愿赡养含泪搭棚露宿”，《燕赵都市报》<http://www.huanqiu.com> 2010年8月11日。
- (21) “不孝子为占房娶媳妇将七旬父母赶出家门”，《扬子晚报》2009年6月29日。

〔付記〕

原稿をチェックして、貴重なアドバイスを頂いた現代社会学科の星明教授に心から感謝いたします。

(ちょう へい 現代社会学科)

2012年4月27日受理